

望ましいPTA活動を求めて

足利市立矢場川小学校PTA

1 はじめに

本校PTAは、平成10年度・11年度の2か年にわたり、栃木県PTA連合会より「研究PTA」の委嘱を受け、より望ましいPTAの在り方を求めて研究・実践に取り組んできた。今回の研究は、ことさらに特別なことを行うのではなく、平常のPTA活動を「研究の視点」から改めて見つめ直し、PTAの在り方を確認し合い、活性化したいとの願いをもって進めてきたものである。今年度11月5日に研究発表を行い公開したが、ここでは、実践活動を中心にして述べてみたい。

2 研究の概要

(1) 研究主題

「生きる力を育てるためのPTA活動」

～今なすべきことの実践を通して～

(2) 主題設定の理由

私たち矢場川小学校PTAは、私たちの子供が20世紀の反省の上にたち、ますます困難な時代になると予想される21世紀を、力強く生き抜いてほしいとの願いから上記のテーマを研究主題として選択した。

サブテーマについては、すべてが分業化による効率主義を重んじる現代社会にあって、子育てや教育さえも保育園や幼稚園、そして学校などの公的機関が受け持つものという錯覚を払拭し、子育てや教育の原点は家庭にあるとの自覚に立ち、親自身が自らの実践を通して、子供たちの成長に添おうとする決意を明記したものである。

研究PTA委嘱校の好機を得て、客観的立場からではなく、現在子育ての真っ只中にある当事者の立場から、私たちは、子供たちにどんな人間像を望み、そのために具体的に何をすることができるのかについて、過去のPTA活動を見直すとともに、今後の活動の在り方を考えようと努めた。

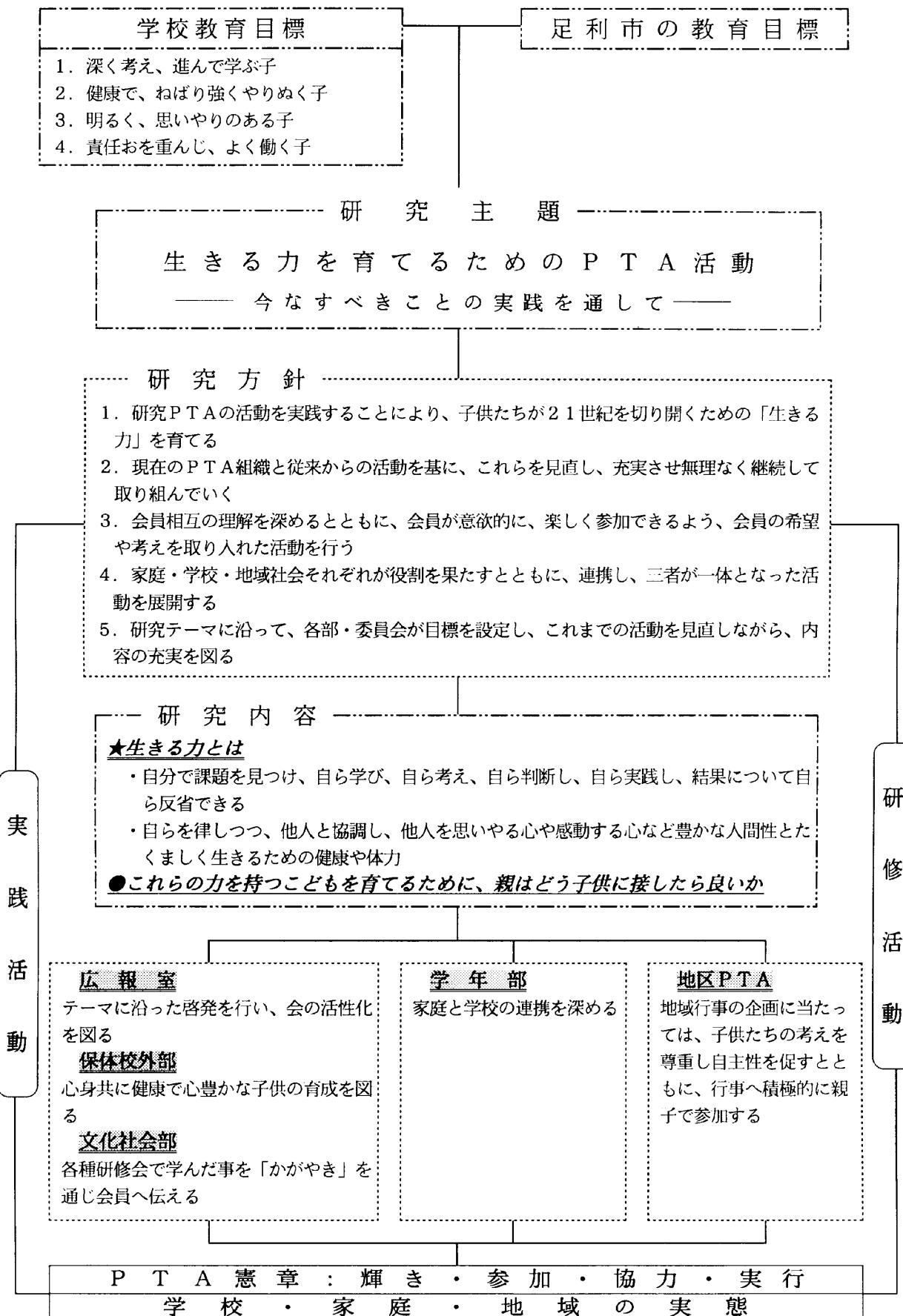
しかし、「生きる力」と言っても、真剣な討議を重ねれば重ねるほど、それぞれの考え方の正当性があり、我が子に望み、託す、「生きる力」のとらえ方は様々であることが認識された。個々の意見や価値観を尊重するということで、象徴的な言葉はあえて用いず、そのまま「生きる力」とした。

また、「今なすべきことの実践」も、子供の個性や家庭の事情、地域社会との関連、役割の違いなど千差万別であることを考慮し、それぞれが子供を中心として、自分にできる具体的な行動を自主的に選択できるよう、これもあえて幅をもたせ「今なすべきことの実践」とした。

子供の育成を植物にたとえ、子供を種とするならば、家庭は根を張る大地であり、学校は雨であろう。そして、地域社会は太陽の光かもしれない。三者のうちどれが欠けても植物は育たない。私たちが研究し、PTAを通して学ぼうとしていることは、教育の責任を他に転嫁することなく、自らの責任を鮮明にし、これを果たすことである。

私たちPTAは、以上の理由に基づき「生きる力を育てるためのPTA活動～今なすべきことの実践を通して～」を、研究主題と定めた。

(3) 研究の構想図



3 活動の実際

(1) 専門部の活動

ア 文化社会部

- ・ お互いの立場や気持ちを認め合い尊重し合いながら、共に生きようとする態度を育むことができるよう、研修会で学んだことを子供たちや P T A 会員に伝えるとともに、P T A 会員の資質向上のための学習の場を提供するということが、活動のめあてである。
- ・ 安足地区社会同和教育指導者一般研修や矢場川小学校 P T A 研修講演会に参加してみて、今、社会で問題となっている「いじめ」「差別」「偏見」等について改めて考える機会が得られた。日常生活の中でよりよい人間関係を築くためには、お互いの立場や気持ちを認め合い尊重しながら、共に生きようとする態度を育むことが大切である。「かがやき」を通じ研修会で学んだことを P T A 会員に伝えることで、各会員が子供の手本となり、人を思い合う優しさや勇気の大切さが分かる子供、だれとでも仲良くできる子供を育てるための動機付けになったのではないかと思う。

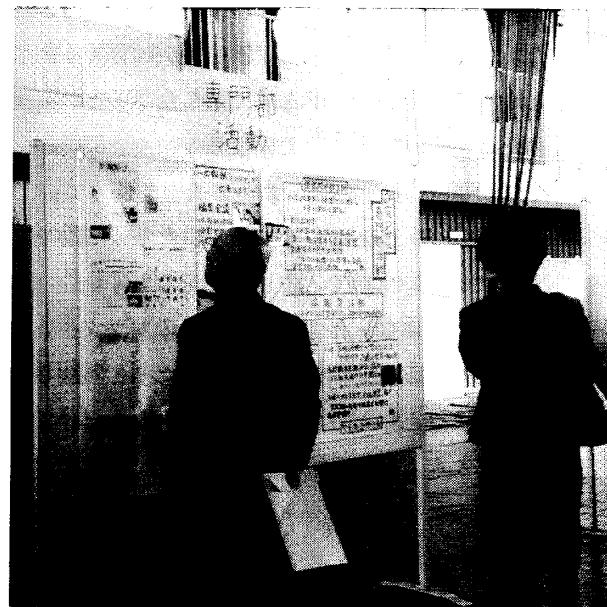
今後も、一人でも多くの P T A 会員に研修会への参加を呼び掛けていきたい。そして、日常生活の中で見過ごしてしまいそうな問題について改めて考えることにより、自分ができることに一人一人が地道に取り組んでいくことを提唱していきたい。

イ 広報部

- ・ 広報紙「かがやき」に P T A 参加の行事・研修会・講演会等を事前に掲載することにより、各会員へ情報を提供し、テーマに沿った啓発を行い、参加を呼び掛ける。また、P T A 活動の様子、研修会等への参加者の声を伝えたり、アンケート特集を組んだりすることにより、会員の関心を高める。
- ・ 主な活動として、広報紙編集のための研修会の開催、広報紙発行のための取材活動、編集マニュアルの作成があげられる。
- ・ 研修会や講演会の事前紹介により、会員の参加者が増えた。また、参加者の感想を掲載することにより、次回への関心度を高めることができた。アンケートを実施することで、矢場川小全体の声を聞くことができ、その内容を載せたことが新たな反響を呼び、広報紙をさらに充実させていく糧となった。
- ・ 今回マニュアルを作成したが、これを土台にして、「かがやき」の継続発行と、さらなる内容の充実が課題にあげられる。

ウ 保体校外部

- ・ 心身共に健康で心豊かな子供の育成を図るというテーマのもと、子供たちの無限に伸びる可能性を信じ、生きた学習を通して何かが得られればと願いつつ、活動を推進してきた。ものを作る喜び、できた時の満足感、肌で感じる体験を積み重ねることにより、自信と意欲に結びつくのではないかと考えたが、親である私たちも日ごろから相手の話をじっくり聞き、同じ目の高さで考える姿勢を身に付けることで、相手の気持ちをわかってあげる心の余裕ができた。心豊かな子供に育ててくれると実感したしだいである。
- ・ 活動のひとつとして、親子運動会を実施した。昨年までは、部員が種目を考え実施していたが、今回は、子供たちの意見を取り入れ、6年生が考えた3つの競技を障害物として種目に取り入れた。大変好評であ



った。実施前の話し合いの中で、子供同士また親子のコミュニケーションを図るということであれば、運動会にこだわらず、何かを体験したり作品を作りあげたりという内容でもよいのではないかという意見も出された。アンケートで感想を聞くだけではなく、何をやりたいかということを事前に把握しておければ参加人数も増え、楽しい行事になると思う。

(2) 学年委員会の活動

「家庭と学校の連携を深める」が学年委員会のテーマである。親が一番知りたいことは、子供たちが学校でどのように過ごしているかである。そこで、親と学校・先生方が家庭や学校における子供たちの様子を伝え合うとともに、学年部会等を通して子供たちの成長段階に合わせた「生きる力」を育てるための事業を行う。

ア 1年

- ・ 入学以来、学校での子供の様子はどんなであるかを心配しない親はいないと思う。今回の行事（親子給食会・歯磨き指導、親子レクリエーション）により親子ともども楽しい一日を過ごすことで、学校というさらに広い社会に溶け込んだ我が子を見て、学校や先生への信頼が生まれた。また、定期的に催される授業参観とは別に、家族や地域社会の人々が気軽に子供たちの様子を見られるような「学校の開放」が計画されるといい。学校・家庭・地域の人々が、相互に理解し合い連携し合うことで、それが自分の責任と在り方を再確認できる方向を目指していきたい。

イ 2年

- ・ 研究PTAのテーマである「生きる力を育てる」ことについて、学年部会で何回か話し合ったが、回を重ねるうちにその方向性が見えてきた。また、子供たちの自主性をいかに育てるかという点について、PとTで話し合うことができたが、今回は生活科での授業のねらいに沿って学級園で育てているサツマイモを使って、「おいもパーティー」をする子供たちの活動を支援するという形で、生きる力を育てていこうということになった。そして、そのサツマイモを使って、収穫祭のやり方を考えたり、料理して食べようしたりする時に、子供たちだけではできないことがあるので、一緒に計画を立て安全に楽しく活動できるように援助することとなった。当日は、子供たちは一生懸命に活動していた。親は後ろにまわり、できる限り子供たちの主体的な姿勢を奪わないように注意しながら支援したが、活動の内容を深めたり、広げたりと豊かなものにできたと思う。
- ・ 親としての子供への接し方について、どこまで親が手を出すか、どこまで見守るかの見極め方を今後とも研究していきたい。そして、さらによりよい子供たちの「生きる力」を探って育てていきたいと考えている。



ウ 3年

- ・ 思い起こすと、日ごろ何気なく子供に接しているつもりでも、子供の行動や態度ばかりに気を取られていた。今回「生きる力を持つ子供」を育てるために親はどう子供に接したらよいかを考え、親子のふれあいの実態を把握し問題点や今後の方向を模索するために「親子ふれあいチェックリスト」を行ったが、親自身がどのように接していたかを改めて考える時間を持つことができた。
- ・ 今回の親子討論会を通して、子供たちの正直な素直な意見をたくさん聞くことができた。親子して確認し

合ったことは、次のようなことである。あいさつを含めた「ありがとう」「ごめんなさい」を親子共々素直に言えるように心掛けること。「怒る」「叱る」「注意する」を使い分けること。日常のふれあいを通して心がふれあえる親子の関係を築くこと。子供の成長を考えて親が手を出したいのを我慢すること。等であった。

- ・今回の一連の活動は、親は子供の生きる力を育てるためにどのようにかかわっていったらよいかを考えるよいきっかけとなった。

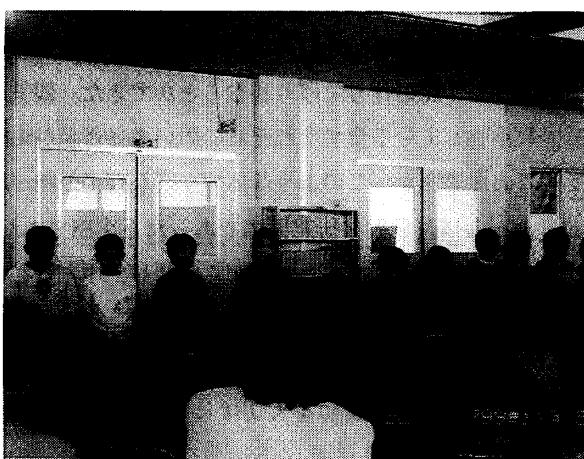
発表会当日の活動案													
1 活動名	親子ふれあいチェックリスト												
2 活動のねらい	「『生きる力を持つ子供』を育てるために、親はどう子供に接したらよいか」を考え、親子のふれあいの実態を把握し、現実の問題点や今後の方向を模索する。												
3 参観の観点	夏休みに実施した親子ふれあいチェックリストの集計をもとに、親子による意見交換の様子や場面。												
4 活動の内容	<table border="1"> <thead> <tr> <th>活動の流れ</th><th>保護者・児童の活動</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>始めのあいさつ</td><td>●学年部長からの本活動の趣旨説明を聞く。</td></tr> <tr> <td>集計結果報告</td><td>●学年委員から集計結果と意見交換のポイントについて説明を聞く。</td></tr> <tr> <td>話し合い</td><td>●提示された観点について、親と子それぞれから意見を発表し合う。</td></tr> <tr> <td>まとめ</td><td>●発表された意見をまとめ、親子のふれあいを今後深めていくためには何ができるか・必要かを確認する。</td></tr> <tr> <td>終わりのあいさつ</td><td>●学年副部長</td></tr> </tbody> </table>	活動の流れ	保護者・児童の活動	始めのあいさつ	●学年部長からの本活動の趣旨説明を聞く。	集計結果報告	●学年委員から集計結果と意見交換のポイントについて説明を聞く。	話し合い	●提示された観点について、親と子それぞれから意見を発表し合う。	まとめ	●発表された意見をまとめ、親子のふれあいを今後深めていくためには何ができるか・必要かを確認する。	終わりのあいさつ	●学年副部長
活動の流れ	保護者・児童の活動												
始めのあいさつ	●学年部長からの本活動の趣旨説明を聞く。												
集計結果報告	●学年委員から集計結果と意見交換のポイントについて説明を聞く。												
話し合い	●提示された観点について、親と子それぞれから意見を発表し合う。												
まとめ	●発表された意見をまとめ、親子のふれあいを今後深めていくためには何ができるか・必要かを確認する。												
終わりのあいさつ	●学年副部長												



エ 4年

- ・「相手の立場を考えられる思いやりのある子供に育てたい」という願いから、夏休みを利用して親子で福祉について話し合い、身近なところから実践することとした。実践例として、祖父母とのかかわりで、肩もみ、買い物の手伝い、車の乗り降りの手助け、お風呂での背中洗いがあげられた。また、アイマスクや車いすや点字体験等の活動、老人ホームや社会福祉救護施設への訪問、病院のおむつたたみも実践された。体験したことは様々であったが、どの子も真剣に考え熱心に取り組んでいた。
- ・福祉について、親子で話し合い考える機会を持つことで、今までにないコミュニケーションがとれたが、福祉体験というのは、難しいことではなく、自分たちの身近にたくさんあることが分かり、お年寄りや体の不自由な人の立場に立って考えられるようにもなった。その結果、今後は、自分たちの身近にできることを継続して行えるように親子で動機づけをしていくことや、今回の経験を一度きりにするのではなく日常心掛けしていくこと、この体験を通して学んだことを生かして、これからも思いやりのある子供に成長していくけるよう親として見守り励ましていくこと、等を確認し合った。

発表会当日の活動案																					
1 活動名	身近な福祉体験																				
2 活動のねらい	相手の立場を考えて行動できる思いやりのある子供に育てたいというねらいのもとに、夏休みを利用して、親子で福祉について話し合い、身近なところから実践してみることにした。そこで、本活動では、体験してきたことを発表し合い、感想を述べ合うことを通じて、相手の気持ちを考えて行動することの大切さに気付かせたい。																				
3 参観の観点	夏休みに体験した身近な福祉についての発表や話し合いを通して、子供や親の思いや願いについての交換。																				
4 活動の内容	<table border="1"> <thead> <tr> <th>活動の流れ</th><th>保護者・児童の活動</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>始めのあいさつ</td><td>●学年部長から本活動の主旨説明を聞く。</td></tr> <tr> <td>体験発表</td><td>●家庭内で実践した福祉体験について発表を聞く。</td></tr> <tr> <td>話し合い</td><td>●感想を話し合う。</td></tr> <tr> <td>まとめ</td><td>●アイマスク・車いす体験の発表を聞く。</td></tr> <tr> <td>終わりのあいさつ</td><td>●感想を話し合う。</td></tr> <tr> <td></td><td>●福祉施設訪問の体験発表を聞く。</td></tr> <tr> <td></td><td>●感想を話し合う。</td></tr> <tr> <td></td><td>●発表されたことをまとめ、今後の課題や継続していくことの大切さを確認する。</td></tr> <tr> <td></td><td>●学年副部長</td></tr> </tbody> </table>	活動の流れ	保護者・児童の活動	始めのあいさつ	●学年部長から本活動の主旨説明を聞く。	体験発表	●家庭内で実践した福祉体験について発表を聞く。	話し合い	●感想を話し合う。	まとめ	●アイマスク・車いす体験の発表を聞く。	終わりのあいさつ	●感想を話し合う。		●福祉施設訪問の体験発表を聞く。		●感想を話し合う。		●発表されたことをまとめ、今後の課題や継続していくことの大切さを確認する。		●学年副部長
活動の流れ	保護者・児童の活動																				
始めのあいさつ	●学年部長から本活動の主旨説明を聞く。																				
体験発表	●家庭内で実践した福祉体験について発表を聞く。																				
話し合い	●感想を話し合う。																				
まとめ	●アイマスク・車いす体験の発表を聞く。																				
終わりのあいさつ	●感想を話し合う。																				
	●福祉施設訪問の体験発表を聞く。																				
	●感想を話し合う。																				
	●発表されたことをまとめ、今後の課題や継続していくことの大切さを確認する。																				
	●学年副部長																				



オ 5年

- ・ 学年部会を子育てに関する学習の場とし、日ごろの思いや悩みなど積極的に話し合うことにより、参加する親の意識が高まってきた。子育てについて話し合った結果、豊かな生活体験、心のこもったコミュニケーションを課題として夏休みに親子で実践することとなった。
- ・ 共通した体験を通じ、親子で感想を話し合う機会が持てたが、今回の実践は、今まで気づかなかった子供の成長を知ったり、親から子へ伝えるものや教えるものを喜んで受け入れる子供の姿を見つけたりすることができた。また、親子の在り方を省みるよい機会となった。そして、子供を見る目が変わり、一歩下がって見守ったり、時には手助けをする、そんな親の姿勢が見られた。学年部の活動等を通して、これらが成果としてあげられる。
- ・ これからも、たとえ簡単な内容であっても子供との会話のキャッチボールを心掛ける。毎日の生活に流されずに、時には「なぜだろう、どうして必要なだろう」と行動の意味と一緒に考える。子供と向き合う時間を作り、心に響く生活体験が重ねられるようにしていく。これらのことを部会に参加することを含め継続していきたい。

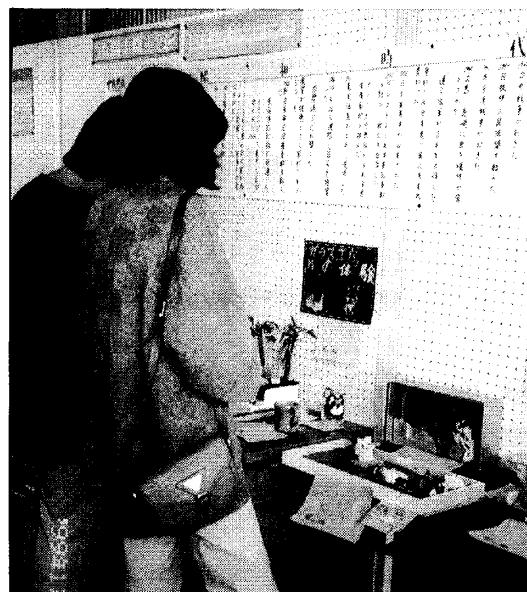
発表会当日の活動案

活動の流れ		内 容
始めの言葉		●親子で「もみじ」を歌う。
研究経過の報告		●豊かな生活体験と心のこもったコミュニケーション」を課題として夏休みの親子実践に取り組むまでの経過を確認する。
体験発表		●夏休みに親子で実践した内容と感想を発表する。 ①親子の語らい ②子供部屋の模様替え ③親子クッキング
話し合い		●体験発表をもとに、意見交換をする。
終わりの言葉		●発表者に、拍手を送る。



カ 6年

- ・ 今の子供たちは大事に育てられすぎの部分があるようと思うが、親は子に対して冷静に判断し、基本的な生活習慣を身に付けさせることが必要であると思う。子供ができるることは子供に任せて責任をもたせ、親は、子供に対してよい点を評価し自信を付けさせれば、子供は意欲が出て何事にも自分の力で取り組めるようになると思う。こんな願いをもって学年部の活動がスタートしたが、夏休みを利用して、親子で考え、力を合わせ、作品作りや記録作りに取り組むことができた。親子がともに活動している姿やそれぞれの思いを各作品から感じることができた。このような体験を通じ親子の絆が深まるとともに有意義な研究実践であったと実感できた。
- ・ 親も子も時間に追われながら生活し、ゆとりを失ってしまいそうのが現状のように思うが、今後ともこのような機会を数多くもち、親子の交流を深め、日常的な小さい活動の積み重ねを大切にしていきたいと思う。



(3) 地区委員会の活動

- 各地区委員は、地域社会と P T A の連携を図るため、地域の育成会行事等に参加・協力し、地域ぐるみで子供たちが健やかに成長するよう側面から地域の活動を支援している。また、行事を企画する場合は、大人たちの考えたものを行うのではなく、子供たち自身に考えさせ自主性を重んじ促すことで、生きる力が育つよう心掛けた。大人が子供たちの考えに耳を傾け受けとめることにより、子供たちが喜びを感じ自信がもてることは素晴らしいことである。
- 親子または友達同士で共に考え方行動し、共に楽しみ、地域の人達との交流を通して、子供たちの生きる力を育てるというねらいのもと、育成会合同で「矢場川地区子供魚つり教室&つり大会」を行った。これからも地元の川で遊べるような、自然を大切にできる心をもった子供たちを地域の人達と一緒に育てていかなければならぬと思った。また、地域の人達との交流を通して人々の心の温かさを子供たちが感じることができた。
- 学校や登校班とはまたちがった上級生と下級生との交流が図れた。親たちも地域の子供たちの顔や様子を知ることができ、他の場所で会った時や、何かあった時に声をかけやすくなり、地域の方々とのふれあいもできたと思う。核家族化が進む中、孤立しないためにも、こういう活動は続けていくべきだと思った。
- 年間を通して子供たちはたくさんの行事に参加しているが、一つ終るごとに自分の心の中に何か感じるものがあるようで、行事への取り組みの中で、子供が変わっていく姿が見えるような気がした。特に高学年が低学年をリードしてゆく姿は、とてもすばらしい成長の証であると感じた。
- 今後も、自治会、育成会、地区委員が緊密に連携し合い、よりよい地域の環境づくりをめざしていきたい。

4 地域との連携活動 略

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 活動を実践するための話し合いや実践活動を通して、会員相互の連帯感が図られるとともに P T A 活動の有意性が確認され、認識が高まった。
- 各行事の目的を研究の視点から検討・確認して臨み、行事終了後に目的の達成度等に基づいた結果の検証を行うなど、各行事がさらに有意義なものとなり、P T A 活動の活性化が図れた。
- 行事の企画段階から子供たちを参加させることにより、子供たち自身の考える力や責任感を引き出すとともに、参加への意欲をもたせることができた。
- 親子でともに実践することを取り入れた活動が多く企画され、親子のコミュニケーションの機会が増えるとともに、親子の相互理解が図られた。
- 地域の方々や関係機関・団体との連携が深まるとともに、P T A 活動に対するさらなる理解と協力を得ることができた。

(2) 今後の課題

- この研究を通して得た成果と課題を、次年度以降の P T A 活動へ具体的に生かし、持続させていくこと。
- 会員の資質の向上を図るために研修の在り方を検討するとともに、会員同士の情報交換の場を充実させ、親としてのあるべき姿をさらに探求していくこと。
- P T A 活動に関する情報を確実に会員へ伝えると共に、地域の方々へも発信すること。

評

矢場川小P T Aでは、学校、家庭、地域の実態把握の上に立ち、「生きる力」をもつ子供を育てるために親は、どう子供に接したらよいかという視点から、研究主題「生きる力を育てるためのP T A活動」を設定されました。この研究主題に迫るため、研究推進委員会を中心に、「生きる力とは何か」「今なすべきことは何か」を全会員で共通理解を図るとともに、研究方針として、無理なく継続していける活動、意欲的に楽しく参加できる活動、家庭、学校、地域が連携した活動をあげ、各専門部、学年部、地区P T Aがそれぞれの目標をもって2か年の研究を進めて来られました。

以下、各部・委員会ごとにその成果をまとめてみます。

専門部 文化社会部では、お互いの立場や気持ちを認め合い尊重し合いながら、共に生きようとする態度をはぐくむことができるよう研修会で学んだことを広報誌を通じてP T A会員に伝えることで、各会員の「子供の手本となって人を思い、だれとでも仲良くできる子供を育てようとする」気持ちが高まった。

専門部 広報部では、研修会・講演会を事前に紹介することにより、会員の参加者が増え、また、参加者の感想を掲載することにより次回への関心度を高めることができた。そして、更に、アンケートを実施することで矢場川小P T A全体の声を聞くことができ、その内容を載たことで反響を呼び、広報誌を充実させていく糧となっただ。

専門部 保育部では、親子運動会において、6年生が考えた3つの競技種目を取り入れ、大好評を得た。このことで親たちが子供の目の高さで考える姿勢を身に付けることの大切さを実感することができた。

学年委員会では、親と先生方が家庭、学校における子供たちの様子を伝え合うとともに、学年部会等を通して子供たちの成長段階に合わせた「生きる力」を育てるための事業を行ってきた結果、どの学年も親は子供の「生きる力」育てるためにどのようにかかわっていったらよいかという関心を高めていた。

地区委員会では、地域社会とP T Aとの連携を図るため、地域の育成会行事等に参加・協力し、地域ぐるみで子供たちの生きる力を育てるねらいのもと側面から地域の活動を支援してきた。その結果、子供たちが地域の人たちとの交流を通して人々の心の温かさを感じることができた。

2002年から全面実施の新学習指導要領によれば、子供の「生きる力」は学校・家庭・地域社会が連携しつつ、育むことが重要であると示されています。今後も本研究を継続し、実践を更に積み上げ、充実されることを期待するとともに、各学校のP T A活動におかれましても本研究が参考になるものと確信して評いたします。